カルディン著『日本殉教精華』の古書冊学的研究（1）

森脇 優紀・小島 浩之

はじめに

アントーニオ・フランシスコ・カルディン（António Francisco Cardim）著『日本殉教精華』（以下 *Fasciculus*[1]）は、16・17 世紀の日本におけるキリスト教の殉教録として知られている。*Fasciculus* は、1646 年にラテン語版がローマで出版され（*Fasciculus e Iapponicis Floribus, suo adhuc Maaentibus Sanguine…*）、1650 年にはポルトガル語版（*Elogios e Ramalhete de Flores Borrifado com o Sangue dos Religiosos da Companhia de Iesu…*）がリスボンで出版された。

同書は、当時の日本図（日本地図）や殉教者達の銅版画が挿入された殉教録として著名であるにもかかわらず、これまで研究対象となることが少なかった。近年では、浅見雅一氏やフェデリコ・パロモ（Federico Palomo）氏による殉教者の銅版画に着目した研究がみられる[2]。

筆者らは、こうした浅見氏やパロモ氏の研究成果も踏まえつつ、国内に所蔵されているラテン語版の *Fasciculus* について、それぞれの所蔵本をテクストとしてではなく、モノとしての側面から検討するという、いわば古書冊学（codicology）[3]的な手法で調査・比較分析を進めている。本稿は、現在までに行うことができた調査・分析の途中経過を報告するものである。

国内におけるラテン語版 *Fasciculus* は、目下のところ、京都外国語大学アジア関係図書館、京都大学経済学研究科・経済学部図書室、慶應義塾図書館、国際基督教大学図書館、国際日本文化研究センター図書館、国立国会図書館、上智大学キリシタン文庫、筑波大学附属図書館、天理図書館、東京大学総合図書館、東洋文庫、東京国立博物館資料館、放送大学附属図書館、早稲田大学図書館[4]、このほか複数の古書店において、その所在が確認されている。

これまでに調査を行ったのは、京都外国語大学アジア関係図書館、京都大学経済学研究科・経済学部図書室、国際日本文化研究センター図書館、上智大学キリシタン文庫、東京大学総合図書館、東洋文庫、放送大学附属図書館である。ただし、東洋文庫本については、なおデータのとりまとめに時間を要するため、挿入された銅版画 1 点に関して言及する以外は、本稿において取り扱わないこととする。

以下本稿では、これらの所蔵本を、それぞれ「京都外大本」、「京大経済本」、「上智キリシタン文庫本」、「東大総図本」、「日文研本」、「放送大本」と略称する。

さらに、複数の古書店所有本のうち 2 点について実見できたので、これらをひとまず書店本 A、書店本 B と呼び、今回の考察対象に加えた。

なお、ポルトガル語版については、仙台市博物館、天理図書館[5]、東京大学史料編纂所[6]の所蔵が確認されており、仙台市博物館については、目下調査しているところである。

1 *Fasciculus* 概要

1）アントーニオ・フランシスコ・カルディン

アントーニオ・フランシスコ・カルディンは、1596 年にポルトガルのエヴォラ近郊のヴィアナ・

ド・アレンテージョに生まれる。

カルディン家は、ポルトガルの貴族の一族で、特に 16 世紀後半から 17 世紀前半にかけては、イエズス会と関係が深い一族であった。実際に、カルディンのおじフェルナン・カルディン（Fernão Cardim）は、イエズス会のブラジル宣教における重要な人物であった。また兄弟のジョアン・カルディン（João Cardim）も、神学生および修練者としての名声を得た人物であった[7]。

カルディン自身は、1611 年にイエズス会に入会している。1618 年にインドへ赴き、ゴアで哲学と神学の研鑽を積み、1621 年に司祭に叙階される。1623 年、マカオのイエズス会のコレジオに派遣され、それから 1630 年代にかけて、カントンの他に、日本管区が宣教を担当していたシャムをはじめとする東南アジアの宣教活動にも従事した。

なお、1632 年から 1636 年にかけては、マカオのコレジオの学院長を務め、1645 年にはローマに赴き、日本管区のプロクラドール（Procurador）として第 8 回イエズス会総会議に出席するなど、イエズス会日本管区における要職に就いていた。その後 1649 年まではヨーロッパに滞在している。

1650 年、ゴアに再び赴く。その後 1652 年から 3 年間は、オランダ人によって捕囚され、1659 年にマカオにてその生涯を閉じた。

2）構成

Fasciculus は、3 部構成となっており、それぞれにタイトルページ（扉）【図 1・図 2・図 3】がつけられ、各部ごとにページ番号が付されている。第 1 部は本書のタイトルがそのまま反映されており、日本で宣教活動に従事し殉教したヨーロッパ人および日本人のイエズス会員と、高山右近・大友宗麟・大村純忠の 3 名のキリシタン大名の略伝について各人ごとに項目立てて記述されている。全 254 ページであるが、途中には乱丁や誤植が見受けられる。詳細は後述する。

各略伝には、各人の殉教の様子などが描かれた 87 枚の銅版画が、本文の紙葉とは別に挿入されている。ただし、81 枚目の銅版画については、名前が不明の 5 名の日本人修道士がまとめて描かれている。

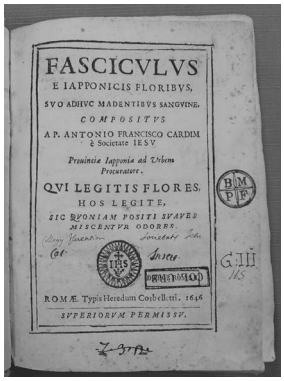

図 1

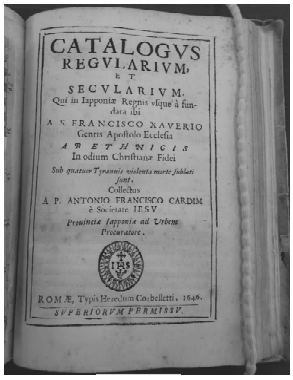

図 2

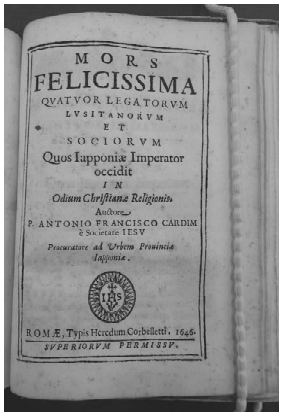

図 3

図 1：第 1 部のタイトルページ

図 2：第 2 部のタイトルページ

図 3：第 3 部のタイトルページ

第 2 部は、*Catalogus Regularium, et Secularium…* のタイトルを持つ殉教者の名簿である（以下、*Catalogus*）。名簿には、1557 年から 1640 年（7 月）までに日本において殉教した人物（聖職者、信徒を含む）が記録されている。ページ構成は、全 79 ページである。

第 3 部は、*Mors Felicissima Quatuor Legatorum Lusitanorum et Sociorum…* である。（以下、*Mors*）これは、日本に貿易再開を求めるためにマカオから派遣された 4 名のポルトガル使節と 57 名の使節団員が、1640 年に幕府によって処刑された出来事に関する報告である。

この報告は、1643 年にすでに、ポルトガル語で単独で出版されており[8]、ラテン語版の報告は、これを基にして作成されたと考えられる。この第 3 部は、全 40 ページである。

Mors は、イエズス会宣教師の殉教に関する内容ではなく、先の第 1 部と第 2 部とは性質が異なる。しかし、カルディンは、ポルトガル・日本間の関係回復にも尽力していたこともあり[9]、ポルトガル使節団の殉教も重要事項と認識し、殉教録や名簿と共に収録したものと推察される。

なお、ポルトガル語版の *Fasciculus* については、ラテン語版と同様の 3 部構成になっているが、第 1 部は 260 ページまで（白紙含む）、続く第 2 部は 261 ページから 332 ページまで（白紙含む）、第 3 部は 333 ページから 380 ページにわたっており、ラテン語版とは異なり、ページ付けが通し番号となっている。

3）図版

国内所蔵のラテン語版の *Fasciculus* には、概ね、折込式の日本図【図 4】が 1 枚と、殉教者の銅版画が 87 枚挿入されている。日本図も殉教者の銅版画も片面刷で裏面が白紙となっている。

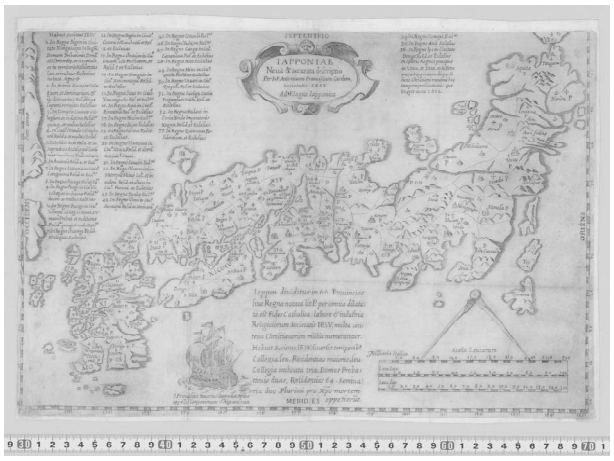

図 4 日本図

日本図は、その上部中央に「イエズス会のアントーニオ・フランシスコ・カルディン司祭による新しく、正確な日本の描写：日本の賛辞にあてて」と記されているように、カルディンによって作成されたものである。

この日本図は、16 世紀半ばから約 1 世紀にわたって作成されたポルトガル関係の地図に日本が描かれたもののうち、テイシェイラ型に分類される。

テイシェイラ型は、1595 年にルイース・テイシェイラ（Luís Teixeira）によって作成され、近代的地図製作の創始者として知られるフランドル人のアブラハム・オルテリウス（Abraham Ortelius）が刊行した地図に収録された日本地図の形式を汲むものである。1595 年以降の半世紀にわたって、このテイシェイラ型が定着した[10]。さらにこの形式は改良が加えられて、1649 年には、ジョアン・テイシェイラ（João Teixeira）によって緯度や形状がより正確となっていく。

また、カルディンの日本図は、ポルトガル人地理学者のイグナシオ・モレイラ（Ignacio Moreira）による日本の地理的調査の情報を基にしていたと考えられている[11]。

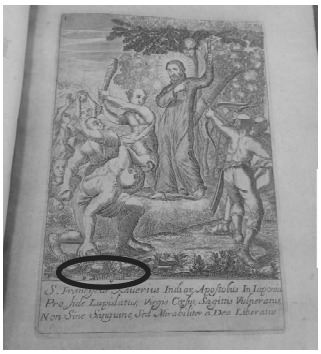

図 5 銅版画 1 枚目

図 6 Pierre Miotte サイン

殉教者の銅版画の 1 枚目と 54 枚目には、それぞれ“P. Miotte fecit”と刻まれている【図 5・図 6】。これは、フランス人銅版画家ピエール・ミオット（Pierre Miotte）が製作したことを示すものである。ミオットは、1640 から 50 年代にかけて、ローマやナポリの印刷業界において活躍してお

り、多数の宗教書や学術書作りに関与していた。また、イエズス会と関係のある司祭に協力をしており、カルディンもそのうちの一人であった[12)]。

1 枚目と 54 枚目以外には、“P. Miotte fecit” と刻まれていないが、パロモ氏は、殉教者の銅版画は、全てミオットの工房で製作されたものであるとしている[13)]。

今回の調査により、国内所蔵本の間には、これら殉教者の銅版画の有無や、日本図の場合は地図の内容にも相違が見られるなど、いくつかの差異が確認できた。さらに、本によっては、これら以外の図版が挿入されているケースもあることが確認された。以上の点については、章を改めて述べる。

2　諸本における比較と考察

1）本文の構成

本稿において、本文とは、図版以外の部分を指す。本文の巻頭から、第 1 部の殉教者各人の略伝（“Elogium”）が始まる前までは、概ね次の順に構成されている。

A. タイトルページ（*Fasciculus e Iapponicis Floribus…*）
B. 教皇イノケンティウス 10 世（Innocentius X）への献辞
C. 出版許可
D. 著者による宣言
E. 正誤表
F. 読者に向けた文章
G. 殉教録に対する賛辞

これらのうち、東大総図本については、上記 B と C が欠落していた。

◇折丁と折記号

折丁とは、いくつかのページを組版して印刷された全紙を、製本用に折り畳んだものの単位をいう。本は、通常、その折丁を複数重ね合わせることで作られる。

折記号とは、折丁単位に付される文字・記号・数字のことで、製本のために折丁を本の巻頭から順に重ねていく作業（丁合取り）のために用いられる【図 7・図 8】。折記号は、1 つの折丁に 1 つだけ付けられる場合もあれば、複数の奇数ページに付される場合もある。

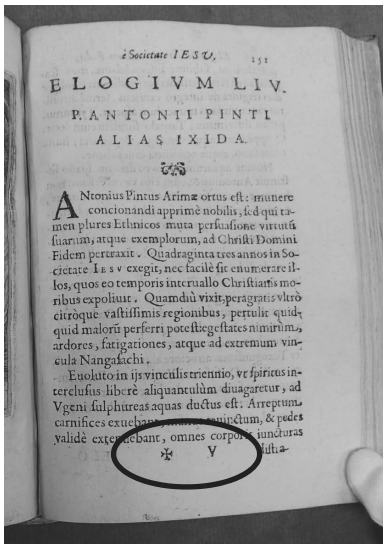
ELOGIVM LIV.
P. ANTONII PINTI
ALIAS IXIDA.

図 7 折記号の一例

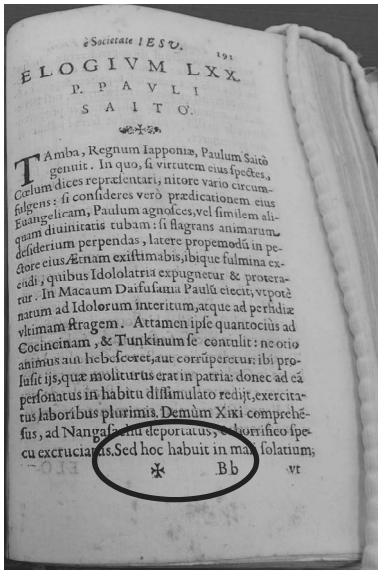
ELOGIVM LXX.
P. PAVLI
SAITO.

図 8 折記号の一例

本書の折丁の構成をみていこう。まず第 1 部は、冒頭から「*」の折記号の入った折丁の後、「*A」からアルファベット順に「*Z」（ただし、J・U・

W は除く）までの折丁が続き、さらに「*Aa」からアルファベット順に「*Ii」までの折丁で構成されている。

第 2 部 *Catalogus* は、「AA」の折丁からアルファベット順に「AK」（ただし、AJ を除く）の折丁までで構成されている。第 3 部 *Mors* は、「A」からアルファベット順に「E」までの折丁で構成されている。

なお、各部のタイトルページには、折記号は印刷されていない。すなわち、第 1 部の「*」、第 2 部の「AA」、第 3 部の「A」は明示されていない。

なお本書の場合、折記号は、全体を通して 1 ページ目と 3 ページ目に付されており、3 ページ目には、例えば「*A2」や「*Aa2」というように、アルファベットの後に「2」の数字が付されている。

◇本書に見られる乱丁、誤植など

折丁の順番が間違っていたり、ページ番号が間違って付されていたり、内容の順番が間違っているものを乱丁という。本書についても、乱丁がいくつか確認された。

まず、諸本に共通してみられた乱丁について述べる。ページ番号に関する諸本共通の乱丁は以下の通りである。

①17 ページの次から、24 ページの前までのページ番号が、本来「18、19、20、21、22、23」となるべきところが、「22、23、20、21、18、19」となっている。

②65 のページ番号が連続して 2 回付されている。ただし、内容の順番は正しく、影響はない。

③87 ページの次から 98 ページの前までが、本来「88、89、90、91、92、93、94、95、96、97」となるべきところが、「92、93、90、91、96、97、94、95、96、97」となっている。本来あるべきはずの 88 と 89 はなく、96 と 97 がそれぞれ 2 回ずつ現れている。ただし、略伝の順序は正しいため、内容に影響はない。

④205 ページと 206 ページの後に、再び 205 と 206 のページ付けがなされている。ただし、内容は本来あるべき順序通りであり、影響はない。

⑤ページ番号が本来「221」と付されるべきページに、「121」の番号が付されている。ただし、内容と折記号には影響はない。

⑥ページ番号が本来「223」と付されるべきページに、「123」の番号が付されている。ただし、内容と折記号には影響はない。

⑦ページ番号が本来「248」と付されるべきページに、「148」の番号が付されている。ただし、内容には影響はない。

諸本にはさらに、V の折記号を持つ折丁（V の折丁）に乱丁が確認された。ただし、それぞれの乱丁のパターンを整理してみると、4 種に分類できることが分かった【表 1】。

本来あるべき V の折丁の印刷は、後掲する**図 9** の標準型で示すように、表と裏の両面に配置される。セル 1 つが 1 ページに対応し、各セル内の上部の数字はページ番号を、各セル中央は略伝の番号とその順序付を表す。例えば、「155」は 155 ページを、「55-03」は 55 番の略伝の 3 ページ目を意味する。また、折記号がついている場合には、セル内下部に「V」「V2」として示している。

標準型の表版では、左上から時計回りに、「155・55-03」→「154・55-02」→「151・54-01・V」→「158・56-02」と配置される。裏版には、同様に「153・55-01・V2」→「156・55-04」→「157・56-01」→「152・54-02」と配置される。

これに対して、諸本に見られる乱丁の 4 類型は、以下の通りである。**表 1** は、諸本における V の折丁の部分について、全体における葉数とその表裏に対応するページ番号・折記号・内容を対照させたものである。ここで同系統のものをまとめて、

京大経済本・書店本 B・上智キリシタン文庫本・日文研本・京都外大本の 5 点を I に、書店本 A を II に、東大総図本を III に、放送大本を IV に分類した。さらに、**表 1** に基づいて実際の折丁を図式化したものが、**図 9** の I から IV である。

表 1

I														
京大経済					書店本B					上智キリシタン文庫				
葉数	表裏	頁	折記号	内容	葉数	表裏	頁	折記号	内容	葉数	表裏	頁	折記号	内容
132	a	151	*V	55-03	135	a	151	*V	55-03	135	a	151	*V	55-03
	b	152		55-04		b	152		55-04		b	152		55-04
134	a	153	*V2	56-01	137	a	153	*V2	56-01	137	a	153	*V2	56-01
	b	154		56-02		b	154		56-02		b	154		56-02
136	a	155		54-01	139	a	155		54-01	139	a	155		54-01
	b	156		54-02		b	156		54-02		b	156		54-02
138	a	157		55-01	141	a	157		55-01	141	a	157		55-01
	b	158		55-02		b	158		55-02		b	158		55-02

I									
日文研					京都外大				
葉数	表裏	頁	折記号	内容	葉数	表裏	頁	折記号	内容
134	a	151	*V	55-03	136	a	151	*V	55-03
	b	152		55-04		b	152		55-04
136	a	153	*V2	56-01	138	a	153	*V2	56-01
	b	154		56-02		b	154		56-02
138	a	155		54-01	140	a	155		54-01
	b	156		54-02		b	156		54-02
140	a	157		55-01	142	a	157		55-01
	b	158		55-02		b	158		55-02

II					III					IV				
書店本A					東大総図					放送大				
葉数	表裏	頁	折記号	内容	葉数	表裏	頁	折記号	内容	葉数	表裏	頁	折記号	内容
136	b	155		54-01	132	a	151		54-01	136	a	151	* V	54-01
	a	156		54-02		b	156		54-02		b	156		54-02
138	b	157		55-01	134	a	157		55-01	138	a	157		55-01
	a	158		55-02		b	154		55-02		b	154		55-02
139	b	151	V	55-03	136	a	155	*V	55-03	139	a	155		55-03
	a	152		55-04		b	152		55-04		b	152		55-04
141	b	153	V2	56-01	137	a	153	*V2	56-01	141	a	153	* V2	56-01
	a	154		56-02		b	158		56-02		b	158		56-02

【標準型】

表版		裏版	
155 55-03	154 55-02	153 55-01 V2	156 55-04
158 56-02	151 54-01 V	152 54-02	157 56-01

【Ⅰ】

表版		裏版	
155 54-01	154 56-02	153 56-01 V2	156 54-02
158 55-02	151 55-03 V	152 55-04	157 55-01

【Ⅱ】

表版		裏版	
151 55-03 V	158 55-02	157 55-01	152 55-04
154 56-02	155 54-01	156 54-02	153 56-01 V2

【Ⅲ】

表版		裏版	
155 55-03 V	154 55-02	157 55-01	152 55-04
158 56-02	151 54-01	156 54-02	153 56-01 V2

【Ⅳ】

表版		裏版	
155 55-03	154 55-02	157 55-01	152 55-04
158 56-02	151 54-01 V	156 54-02	153 56-01 V2

図 9

Ⅰから Ⅳ の各類型における印刷面の配置について、上述の標準型と同様に、表版・裏版それぞれ左上から時計回りに示すと下記の通りである。

【I】表版：「155・54-01」→「154・56-02」→「151・55-03・V」→「158・55-02」
裏版：「153・56-01・V2」→「156・54-02」→「157・55-01」→「152・55-04」

【II】表版：「151・55-03・V」→「158・55-02」→「155・54-01」→「154・56-02」
裏版：「157・55-01」→「152・55-04」→「153・56-01・V2」→「156・54-02」

【III】表版：「155・55-03・V」→「154・55-02」→「151・54-01」→「158・56-02」
裏版：「157・55-01」→「152・55-04」→「153・56-01・V2」→「156・54-02」

【IV】表版：「155・55-03」→「154・55-02」→「151・54-01・V」→「158・56-02」
裏版：「157・55-01」→「152・55-04」→「153・56-01・V2」→「156・54-02」

I は、ページ番号と折記号は正しい配置であるが、略伝（表内では内容と称する）の配置がそれぞれ対角線でずれている。なお V の折丁内の乱丁について、上智キリシタン文庫本では、150 ページに「151 ページは 158 ページの続き」（“S. 151 ist Fortsetzung von S.158”）と、158 ページに「続き　151 ページ」（“Fortsetzung S.151”）と、ドイツ語による書き込みがあり、略伝の文章がどのページに続くのかを示している。

II は、略伝の配置は正しいが、ページ番号と折記号の配置については、表版と裏版の各面それぞれ対角線でずれている。

III は、略伝の配置は正しいが、ページ番号については、裏版が対角線でずれており、折記号については、両面ともに対角線でずれている。

IV は、略伝の配置は正しいが、ページ番号と折記号については、裏版において対角線でずれている。

以上、各類型の相違点を表にまとめると次の**表 2** のようになる。

表 2

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
頁番号	表版	○	×	○	○
	裏版	○	×	×	×
折記号	表版	○	×	×	○
	裏版	○	×	×	×
内　容	表版	×	○	○	○
	裏版	×	○	○	○

各類型ごとに、表版・裏版各面におけるページ番号・折記号・内容について、標準型と対照し、同じであれば○を、異なれば×を付した。

表から、I は、ページ番号と折記号は正しい位置にあるが、内容の配置に誤りがあり、II はその逆で内容の配置のみが正しく、III は、内容と表版のページ番号の配置が正しものの、折記号と裏版のページ番号に誤りがあり、IV は、裏版のページ番号と折記号に誤りがあることが分かる。これらの誤りに関する詳細は、すでに述べた通りである。

以上のように、V の折丁の部分の乱丁が類型化できることから、諸本の印刷の時期に違いがあることも推察される。今後、国内所蔵本の調査を継続し、さらに比較・分析することで、諸本における印刷の前後関係や印刷の過程、さらには本の流通過程などをたどる手がかりが見出せる可能性もあろう。

諸本に共通してみられる誤植は、173 ページに確認された。173 ページは、ヤコボ・度島（修道士・日本人）の略伝の最初のページである。各略伝の最初のページのトップには、略伝の番号（ローマ数字）と人名が記されている。173 ページの場合、略伝の番号は本来「LXIII」（63）となるはずだが、「LXVIII」（68）となっている。ただし、文章自体には影響はない。

乱丁や誤植ではないが、印字のかすれについてもここで指摘しておく。日文研本では、121 ページと 237 ページのページ番号の 10 の位がかすれている。また、京都外大本では、211 ページと 234 ページのページ番号がかすれている。

こうした印字のかすれは、印刷が繰り返し行われたことで活字が摩耗したことに起因する場合も考えられ、後刷であることを示す一つの判断材料となる可能性もある。

2）図版

◇殉教者の銅版画

殉教者の銅版画は、通常 87 枚挿入されているが、東大総図本には、1 番目のフランシスコ・ザビエルの銅版画が欠落している。京大経済本には、21 番目のジョアン・ダ・フォンセカ（司祭・ポルトガル人）と 22 番目のアゴスティーニョ太田（修道士・日本人）の銅版画が欠落している。

各銅版画は概ね、各略伝の文章の前に挿入されているが、諸本の中には、この順序になっていない箇所も確認された。

放送大本は、全ての銅版画は略伝の前に挿入されている。京大経済本、上智キリシタン文庫本、日文研本、書店本 B は、前節で指摘した通り、V の折丁の略伝の順序が乱れているため、54 番と 55 番の銅版画よりも先に 56 番の銅版画が挿入されてしまっている。ただし、全銅版画は、原則通り、それに対応する各略伝の最初のページの前に挿入されている。

京都外大本は、V の折丁の部分は京大経済本等と同様であり、さらに 4 番の銅版画が 6 番の銅版画と 6 番の略伝の間（33 ページの前）に挿入されている。

書店本 A は、概ね略伝の前に銅版画が挿入されている。ただし、56 番の銅版画が挿入されるべきところに 57 番のそれが挿入され、57 番の銅版画が挿入されるべきところに 56 番のそれが挿入されている。

東大総図本については、複数のイレギュラーが確認された。2 番と 3 番の銅版画が、5 番の略伝（32 ページ）の後に、「3 番―2 番」の順に挿入されている。37 番の銅版画は 36 番の略伝の途中（102 ページと 103 ページの間）に、45 番の銅版画は 46 番の略伝の途中（132 ページと 133 ページの間）に挿入されている。51 番と 52 番の銅版画は、51 番の略伝の途中（144 ページと 145 ページの間）に、「52 番―51 番」の順に続けて挿入されて、53 番の銅版画は、52 番の略伝（147 ページ）の前に挿入されている。56 番の銅版画は、55 番の略伝の途中（154 ページと 155 ページの間）に挿入されている。

この図の表（オモテ）の置かれる位置について、浅見氏は「殉教図は、すべて左頁に置かれており」[14]と述べ、図の表が左側に置かれるとしている。しかし今回の調査で、銅版画の表が奇数ページ側（右ページ）に位置するか、偶数ページ（左ページ）に位置するかは、諸本によって相違がみられることが確認された。以下、右側に図の表が置かれるパターンを、諸本ごとに列挙する。

京都外大本、東大総図本（ただし 1 番は欠）、上智キリシタン文庫本は、図の表が全て右側に置かれている。

放送大本については 81 番のみ、書店本 A については 50・81～84 番が、書店本 B については 8・17・22・32～87 番が、図の表を右側に置いている。

京大経済本と日文研本については、より複雑になっている。京大経済本は、17・32・34～38・40～47・51～59・61～71・74～81・83・85～86 番が、日文研本は、1～2・9～22・24～25・28～29・32～33・36～37・40～41・44～45・48～49・52～53・58～60・64・66・68・72・74・78～70・82・84～87 番が、図の表を右側に置いている。

さて、これらの銅版画には、図中に通し番号が付されている。これについて浅見氏は、「殉教図には、図中の左上に」[15]通し番号が付されているとしているが、17 番・32～87 番は右上に番号が付されていることが確認された。これらは、諸本に共通している。

◇日本図

東大総図本と書店本 A には、日本図は挿入されていない。また、日本図の挿入位置について、浅見氏は「巻頭には日本図一枚が畳み込まれている。」[16]としているが、諸本によって差異が見られる。

上智キリシタン文庫本および京都外大本は、本稿第 3 章 1 節の冒頭で紹介した「F.読者に向けた文章」の前に、「表―裏」の順で折り込まれている。

放送大本は、「G.殉教録に対する賛辞」の前に、

「裏―表」の順で折り込まれている。

書店本 B は、第 1 部のタイトルページの後に「表―裏」の順に、また日文研本は、第 1 部の一番最後のページの次に「裏―表」の順に折り込まれている。

京大経済本は、第 3 部 *Mors* の一番最後のページの次に「表―裏」の順に折り込まれている。

なお、日本図の細部を観察すると、上智キリシタン文庫本のそれは、ほかのものとの差異が確認された。以下、顕著なものについて述べておく。

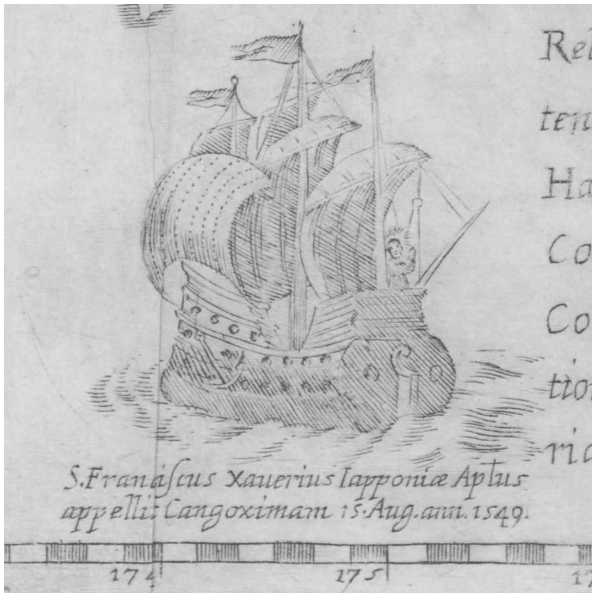

図 10 日本図拡大図（“15 Aug. aun. 1549”）

図の下方にある帆船の下部には、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸したことを記した文章がある。それを詳細に確認すると、そのほかの諸本では、上陸年月日について“15 Aug. aun. 1549”（1549 年 8 月 15 日）となっているところが【図 10】、上智キリシタン文庫本では、“15 Aug. aun. 1543”となっている。

また、日本諸国の名称を観察してみると、播磨国について、そのほかの諸本は“Farima”と記されているところが、上智キリシタン文庫本では、“Harima”と記されている。

さらに、上智キリシタン文庫本の日本図の紙は、手触りが違い、そのほかのものよりも極端に薄かった。後述するように、そのほかのものに付属する日本図の料紙の厚みの平均が 0.13mm であるのに対し、上智キリシタン文庫本の日本図の料紙の厚みは、0.04mm であった。顕微鏡によって、紙の繊維を観察すると、リネン（亜麻）やコットンの繊維とは異なり、繊維の幅は狭く、繊維自体に透明感があった。また、簀目は観察できず、紗などを漉き具に敷いて漉かねばならない細かな繊維であることが分かる。これらから考えられるものとしては、雁皮紙である可能性が高い。

海老沢有道氏は、日本図について、ファクシミリ版の存在について触れ[17]、1938 年に曽我部重太郎が、今治カトリック教会所蔵のファクシミリ（「模写図」）について紹介していたと言う。

この今治カトリック教会所蔵のファクシミリについても、上智キリシタン文庫本同様の違い（“15 Aug. aun. 1543”）が指摘されていることから[18]、上智キリシタン文庫本の日本図もファクシミリであると考えられる。今治カトリック教会と上智キリシタン文庫本のファクシミリとの関連については、現段階では不明である。今後の調査課題としたい。

◇そのほかの図版

書店本 A と京都外大本には、上述の 2 種の銅版画とは別の銅版画が挿入されている。以下、これを版画 A と呼ぶ【図 11】。

書店本 A は、第 1 部のタイトルページの後に、裏―表（版画の面）の順に挿入されている。一方、京都外大本は、第 1 部のタイトルページの後に、表―裏の順に挿入されている。

版画下部の欄外には、*Le Pourtraict des premier 23 Martire mis en Croix par la predicaōn. de la S. foy au Giapponsoubs l'Empe. Taicosam en la Cité de Mongasachi, de lordre des freres mineurs Observatin*

de S. Francois（原文ママ）との記述ある。これは、1597 年に太閤（Taicosam）・豊臣秀吉の命により長崎で処刑された 26 聖人の殉教の様子を描いたものであると考えられる。

図 11 版画 A

ここには26名のうちの23名しか描かれていないが、上記の記述から、イエズス会員 3 名を除く、フランシスコ会修道士達 23 名の殉教を描いたものと推察される。

また版画左下には、“Callot fec.”の文字が刻まれていることから、ロレーヌ公国の版画家・ジャック・カロ（Jacques Callot）の作品であることが分かる。

版画 A が挿入されている例は、現時点では書店本 A と京都外大本のみであるため、本来挿入されるべき銅版画なのか否かは不明である。ただし、第 2 部の *Catalogus* の 6～7 ページの 1597 年の項には、26 聖人全員について記録されているので、版画 A は、本書に関連した内容を含んだ版画ということができる。

なお、カルディンとこの版画の制作者であるカロとの間に交流があったという記録は、現時点では確認できていない。

2 冊ある東洋文庫本のうちの 1 冊には、さらに別の銅版画が挿入されている。第 3 部のタイトルページの前に「表（版画の面）―裏」の順で挿入されている。以下、これを版画 B と呼ぶ【図 12】。

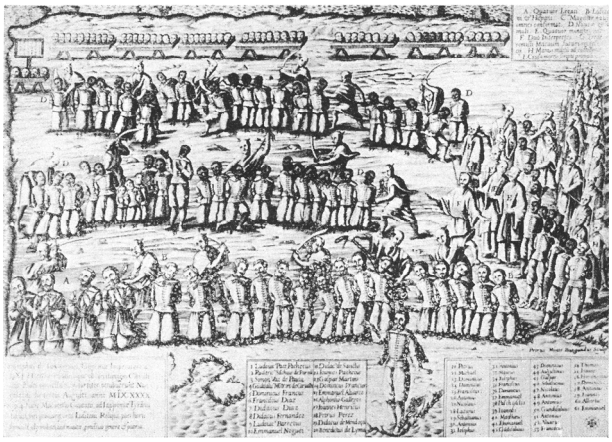

図 12 版画 B

版画の左下には、*Triumphus de Toxonguno, Iapponiae Imperatore, a LXI Heroibus relates…*と記されたキャプションがある。ここから、1640 年に日本に貿易再開を求めてマカオから派遣された 4 名のポルトガル人と 57 名の使節団員が、徳川幕府の命令で処刑されている様子の描かれた銅版画であることが分かる。

この版画 B がラテン語版に挿入されている例は、現時点では、東洋文庫本で確認できたのみである。ただし、仙台市博物館が所蔵するポルトガル語版にも挿入されていることは、確認済である。

OCLC（Online Computer Library Center）が提供する書誌情報の注記からも、ポルトガル語版には、日本図と殉教者の銅版画以外に、版画 B が挿入されている刊本が確認できる[19]。イギリスの歴史学者で、*The Christian Century in Japan 1549-1650* で著名な C.R.ボクサーの旧蔵書にも、版画 B が挿入されていたようである[20]。ただし、ポルトガル国立図書館の Biblioteca Nacional Digital でデジタル公開されている 2 冊には、この版画は挿入されていない[21]。

なお、版画 B の右下には、“Petrus Miotte Burgunda Sculp.”とあり、ピエール・ミオットの作であることが明らかである。ミオットが殉教者各人の銅版画を手掛けていることを考慮すると、この版画 B も、*Fasciculus* の第 3 部のために手掛けた可能性が高い[22]。

3）装丁

諸本の装丁については、約半数は近代の再製本と考えられるが、日文研本、放送大本、書店本 A、書店本 B については、より古い製本様式・構造を保っている。

書店本 A を除いた 3 冊は、リンプ装と呼ばれる製本様式である【図 13】。

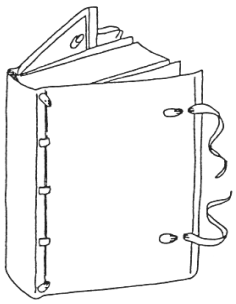

図 13 リンプ装

リンプとは、英語でしなやかなという意味である。本の中身を綴じる際に用いる芯材（綴じ支持体）が、表装材（表紙に用いられる素材）に通されることで中身と表紙が接続される製本様式をリンプ装という。主として 16 世紀後半以降の実用的製本に用いられた。表装材は、羊皮紙やヴェラム（仔牛皮）などの獣皮紙や厚手の手漉き紙である。

一方の書店本 A は、表紙の素材は古い物を残しているが、背が補強がなされるなど[23]、綴じについては改変の跡が観察される。

4）料紙

Fasciculus に用いられている紙について、その厚みを測定し、顕微鏡により繊維の観察を行った。

使用機器とデータの算出方法については、次の通りである。料紙の厚さの測定には、シックネスゲージ（ミツトヨ : 547-321）を使用し、日本図は 1 紙の袖・奥・天・地から、本紙および殉教者の銅版画は各葉の小口とノドから 12 点を測定して平均をとり、小数点以下 3 桁目を四捨五入した。

繊維および填料の確認には、杉藤の TS-8LEN-100WT 顕微鏡（ただし接眼・対物の両レンズを被写界深度の深いものに交換している）を使用し、目視観察に加えて、接眼レンズに CCD カメラ（レイマー : WRAYCAM NF500）を取り付けてデジタル画像の撮影も行った。顕微鏡による観察では、対象の料紙の下から有機 EL パネルを使用して光（透過光）を当てて観察した。また、料紙と顕微鏡の間には、文書への負担を軽減するために間紙を置いた。

本紙・銅版画・日本図の厚みの平均値を**表 3** として掲げる。

表 3

	本紙	銅版画	日本図
京都外大	0.11	0.12	0.13
京大経済	0.11	0.10	—
上智キリシタン文庫	0.11	0.11	0.04
東大総図	0.15	0.16	—
日文研	0.12	0.11	0.13
放送大	0.10	0.11	0.14
書店本 A	0.11	0.12	—
書店本 B	0.17	0.15	0.12

（単位 : mm）

測定箇所は、本紙については 61 ページ、銅版画については 17 番である。ただし、東大総図本については、該当ページが両面から薄い和紙で補強されていたため、65 ページで測定した。日本図については、京大経済本は、全面に裏打ちがあり、

測定ができなかった。東大総図本と書店本 A には、日本図は挿入されていなかった。

本紙の料紙と銅版画の料紙は、厚みの面ではほぼ差がなかった。どちらも 0.10mm から 0.17mm までの間に分布しており、識別の点で有意の差はない。

日本図については、裏打ち等の無い初な紙であった 5 点を測定・観察の対象とした。このうち、上智キリシタン文庫本については、先述の通り、ファクシミリの可能性が高く、料紙を構成する繊維も他の 4 点とは異なる。

京都外大本、日文研本、放送大本、書店本 B は、ほぼ厚みが同じで、平均で 0.13mm である。

料紙の繊維は、上智キリシタン文庫本の日本図以外は、同質のものと考えられる。サンプルとして、日文研本の繊維写真（100 倍）を**図 14** から**図 16** として示す。

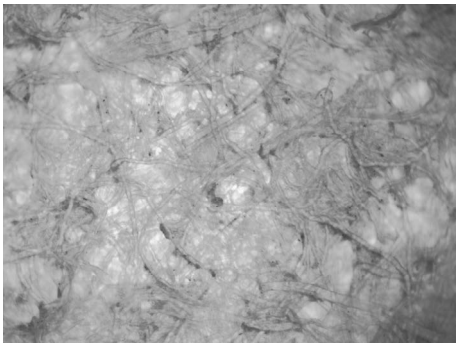

図 14　本紙

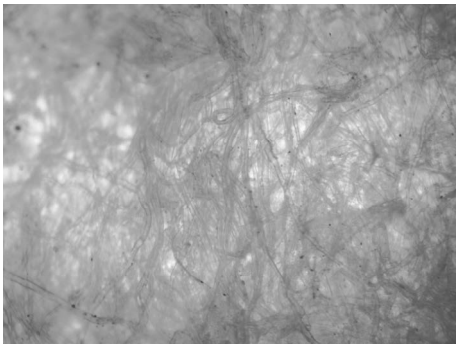

図 15 銅版画

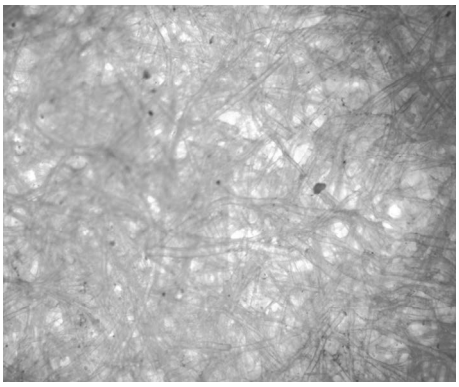

図 16 日本図

いずれも、繊維がよく叩解されており、また適宜切断されたり、つぶれた痕跡が観察される。かつ、所々に染色された繊維も見られ、いわゆるボロ布を使用した紙（ラグペーパー）の特徴を有している。繊維幅は広く、結節があり、リネンを中心とする原料で漉かれたものと考えられる。

ウォーターマークについては、複数の存在を確認しているが、これについては、稿を改めて述べることとする。　（未完）

【附記】本稿執筆にあたって、諸本の所蔵者および所蔵機関の協力を得た。ここに改めて、感謝の意を表したい。本稿は JSPS 科研費 16K12543 による研究成果の一部である。

（もりわき　ゆき：東京大学大学院経済学研究科特任助教）
（こじま　ひろゆき：東京大学大学院経済学研究科講師）

【図版出所一覧】

図 1・図 2・図 3・図 5・図 6・図 8・図 14・図 15・図 16：国際日本文化研究センター図書館所蔵　撮影は筆者による

図 4・図 10：放送大学附属図書館所蔵「西洋古版日本地図」の No.22
画像提供元：放送大学付属図書館

図 7：放送大学附属図書館所蔵　撮影は筆者による

図 11：British Museum 所蔵　画像は Collection Online によって公開されているものから引用した。
（Creative Commons: CC BY-NC-SA 4.0）
Jacques Callot, *Le Pourtraict des premier 23 Martire mis en Croix par la predicaõn. de la S. foy au Giapponsoubs l'Empẽ. Taicosam en la Cité de Mongasachi, de lordre des freres mineurs Observatin de S. Francois*

図 12：Charles Ralph Boxer, Embaixada de Macau ao Japão em 1640, Lisboa: Imprensa da Armada, 1933, between pp.18-19.

図 13：岡本幸治「保存情報としての製本構造（2）―西洋古典資料の保存のために―」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』21、2001 年 3 月、44 頁。

---

1) 略称は、ラテン語のタイトルによる。
2) 浅見雅一「アントニオ・カルディン著『日本の精華』について―殉教者の画像を中心として―」『近世印刷史とイエズス会系「絵入り本」』（平成 21~25 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「15~17 世紀における絵入り本の世界的比較研究の基盤形成」報告書）慶應義塾大学文学部、2014 年、135-158 頁。（以下、浅見「カルディン」）
Federico Palomo, "Purocurators, religious orders and cultural circulation in the Early Modern Portuguese Empire: printed works, images (and relics) from Japan in António Cardim's journey to Rome (1644-1646)", in *e-journal of Portuguese History*, Vol.14, number 2, 2016.12, pp.1-32.（以下、Palomo 2016）
――, "António Francisco Cardim, la misión del Japón y la representación del martirio en el mundo portugués altomoderno", in *HISTORIA*, XXXIX, 1, 2015.3, pp.7-40.（以下、Palomo 2015）
3) 古書冊学についての詳細は、高山博、池上俊一編『西洋中世学入門』東京大学出版会、2005 年、54-58 頁を参照のこと。
4) 浅見「カルディン」157 頁の註 13。
5) Catalogue of the rare books of The Tenri Central Library, Tenri: The TenriCentral Library, 1957, p.15. 海老沢有道『地方切支丹の発掘』柏書房、1976 年、9 頁。（以下、海老沢 1976）
6) 浅見「カルディン」157 頁の註 15。
7) Palomo 2015, pp.14-15. Palomo 2016, p.6.
8) Relação da Gloriosa Morte de Qvatro Embaixadores Portuguezes da Cidade de Macao, com cinco-enta & sete Christaõs de ua Companhia, degolados todos pela FéChristo em Nangasachi Cidade de Iap-paõ, a tres de Agosto de 1640（原文ママ）なお、スペイン語でも刊行されたことについて浅見氏が言及している。浅見「カルディン」142 頁。
9) 阿久根晋「ポルトガル人イエズス会士アントニオ・フランシスコ・カルディンの修史活動―『栄光の日本管区におけるイエズス会の闘い』の成立・構成・内容をめぐって―」『歴史文化社会論講座紀要』12、2015 年 2 月、78 頁。
10) 三好唯義「日本地図の変遷とイエズス会報告」『歴史地理学』No.126、1984 年 9 月、37 頁。
11) 三好前掲論文、41 頁。
12) Palomo 2016, p.20.
13) Ibid., p.20.
14) 浅見「カルディン」143 頁。
15) 浅見前掲書、144 頁。
16) 浅見前掲書、139 頁。
17) 海老沢 1976、7-8 頁。
18) 同書、8 頁。

19) “[1] folded plate showing the beheading by the Japanese of 61 secular martyrs, with their names.”
20) Charles Ralph Boxer, *Embaixada de Macau ao Japão em 1640*, Lisboa: Imprensa da Armada, 1933, between pp.18-19. Benjamim Videira Pires, S.J., A embaixada mártir, 2.ª edição, Macau: InsititutoCultural de Macau, 1988, p.79.
21) Biblioteca Nacional Digital: http://purl.pt/12675/1/index.html#/1/html http://purl.pt/14062/1/index.html#/1/html (accessed: 24/01/2018)
22) Palomo2016, p.20.
23) 背には、クーターが貼られていた。クーターとは、本の背固めに用いられる筒状の背紙を指す。